

Vent

音楽教育 ヴァン

vol. 56

巻頭インタビュー

原田尚美

南極から見据える地球と私たちの未来

特集

こなっしーPresents

小学校デジタル教科書活用術 Vol.1

参考楽譜

ヴォイパ付きア・カペラ『ドラえもん』

(作詞:星野源 作曲:星野源/菊池俊輔 編曲:アベタカヒロ)





シャンゼリゼ通りに響いた《からたちの花》

今から94年前の夏、パリのシャンゼリゼ通りを合唱しながら闊歩する若き日本人留学生たちがいた。

1930年8月10日

「からたちの花」の四部合唱を約三分の一くらいまとめた。アヴェニュー・フォーシュを歩いて、エトアールをぬけて、シャンゼリゼを通り……歩きながら歌い通しである。

歌えない吉井は、何やらぶつぶつ言いながらついて来るのが、おかしきも気の毒でもあった。

これは、高木東六(1904～2006)が留学先のパリでつけていた日記の抜粋である(遺族提供、筆者翻刻)。当時パリでピアノを学んでいた高木は、作曲や編曲の試作をしては、友人たちに歌ってもらい、反応や響きを確かめていた。帰国後、高木は作曲家として活躍する。

「歌えない吉井」とは、画家の吉井淳二(1904～2004)である。合唱のメンバーには、島崎藤村の次男で画家の島崎鶏二(1907～1944)もいた。いずれも同時期にパリへ留学し美術を学んでいた。専門分野や得意不得意は関係なく、彼らは声を重ねた。異国で慣れない生活を送る彼らの心に、《からたちの花》はどう響いたのだろうか。

北原白秋による《からたちの花》の詩は1924年に、山田耕筰が付けた曲は1925年に発表されたばかりで、当時は新しい曲だった。100年後の2024年夏、パリで100年ぶりのオリンピックとパラリンピックが開催された。中継でシャンゼリゼ通りが映し出されるたびに、《からたちの花》が頭をよぎった。

藤井浩基(島根大学 教授)

Contents

- 3 | 巻頭インタビュー
原田尚美(第66次南極地域観測隊長)
- 8 | 授業者に訊く①
田川良久(伯耆町立溝口小学校 教諭)
- 13 | 授業者に訊く②
竹内隆子(福井市文殊小学校 教諭)
- 18 | 特集
こなっしーPresents
小学校デジタル教科書活用術 Vol.1
- 22 | Kyogei Presents
音楽診断
[第21回] 反戦や、戦争に対する思いが反映された曲編(監修・解説:小沼純一)
- 24 | Information
- 26 | 参考楽譜
ヴォイパ付きア・カベラ『ドラえもん』
(作詞:星野源 作曲:星野源/菊池俊輔 編曲:アベタカヒロ)
- 34 | エッセイ
新・音から広がる世界 [第16回] 藤原道山

*本誌に記載されている職名は令和6年8月現在のものです。

巻頭インタビュー

南極から見据える 地球と私たちの未来

第66次南極地域観測隊長 聞き手
原田尚美 坂元勇仁



東京大学 大気海洋研究所教授の原田尚美先生は、第66次南極地域観測隊の隊長として、この冬南極へ出発されます。女性が観測隊長に任命されるのは初めてのことです。第33次、第60次に続く3度目の南極訪問に向けた準備やご自身の研究、そして過去2回の観測を通して原田先生が経験されたという「無音の世界」について、さまざまに語っていただきました。

南極への出発に向けて

坂元：第66次南極地域観測隊長として12月から南極へ行かれると伺いました。現地にはどれぐらいの期間滞在されるのですか？

原田：2024年12月5日に出発し翌年4月5日に帰還しますので、ちょうど4か月間です。南極地域観測隊には夏隊と越冬隊という滞在期間の異なる2つの組織があり、私はこの夏隊に参加します。夏隊は夏の期間のみ、越冬隊はこの期間に加えて、さらにもう1年長く昭和基地に滞在します。

坂元：出発の前はどのような準備をされるのでしょうか？

原田：まず7月1日に、国立極地研究所にて隊員室が開設されます。そこから隊員が集まり始めて、主に物資の調達などをします。南極では1人何役もこなす必要がありますので、企業での研修なども受講します。

坂元：乗船するのは南極観測船SHIRASE（しらせ）ですか？

原田：そうです。観測隊の乗船人数の上限が85名、それに加えて総勢179名の海上自衛隊が同行します。観測隊は、



● 坂元勇仁(さかもと・ゆうじ)
音楽文化プロデューサー。ビクターエンタテインメント株式会社ディレクターを経て、2005年に有限会社ユージンプランニングを設立し現在に至る。主な制作作品として「原典による近代唱歌集成 誕生・変遷・伝播」「アジアの音楽と文化」(ともにビクターエンタテインメント)など。また、ディレクターを担当した「漆原啓子&漆原朝子 無伴奏ヴァイオリン・デュオ」「モーツァルト：ヴァイオリンとピアノのための作品全集」(日本アカースティックレコーズ)が文化庁芸術祭レコード部門優秀賞を受賞した。著書に『明日も会えるのかな？ 群青-3.11が結んだ絆の歌』(パナムジカ)が、共著に『はじめてのインターンシップ 仕事について考えはじめたあなたへ』(アルテスパブリッシング)などがある。現在、大阪芸術大学客員教授、東京音楽大学特任講師、日本大学芸術学部非常勤講師。

先生がおっしゃるようなスケールの大きなものの見方や、世界を取り巻く課題への興味・関心が、より多くの人たちへと広がっていったらいいですね。

約4人に1人が女性です。

坂元：おそらく我々が想像もつかないような職種の方も参加されるのだらうと思います。

原田：南極ではまず自分たちの生活を成り立たせるところから始める必要があるので、設営系の隊員として、調理人、医師、建築業界の人や、機械、発電機、車両担当など、さまざまな職種の方が参加します。越冬隊は30人中20名が設営系の隊員で、夏隊は80~90人のうちの大部分が観測系の隊員で構成されています。

坂元：極地に慣れるための訓練などもあるのでしょうか？

原田：観測隊のメンバーが決まったあと、3月に冬期訓練を1週間ほど行います。主にロープワークやクレバスという氷の裂け目に落ちたことを想定したレスキュー訓練、またけが人をいかに少ない資材で運ぶかといった災害、応急処置を含めたさまざまな訓練を行います。座学の訓練もありますので、観測隊の隊員室開きの前には2回ほど全員で集まる機会があります。

坂元：観測隊長は隊全体をマネジメントしていくことも重要な責務かと思います。一般的な企業や組織のマネジメントとは違った難しさをお感じになりますか？

原田：多種多様な隊員がおりますので、なかなか一筋縄ではいかないだらうと思っています。日常会話を通してその人の人物像を少しずつひもといていくという感じです。

きっかけは人との出会い

坂元：南極地域観測における先生の研究について教えてください。

原田：海洋中を雪のように降り注ぐ「マリンスノー」と呼ばれる巨大な粒子があります。これは表層でプランクトンが合成する有機物や動物プランクトンの排泄物、生物の死骸など多様な粒子の凝集体です。植物プランクトンの光合成によってつくられた有機物を出発点として起こる食物連鎖、そのベースとなる有機物は速やかに深層に運ばれることで炭素を吸収する役割を果たします。これを「生物ポンプ」と呼びます。南極周辺でどれくらい生物ポンプの機能が働いているかを明らかにするため、深い海に観測機器を設置して、マリンスノーを採取・観測することが、第33次における私の仕事のメインミッションでした。錘を付けたマリンスノー採取用の機器を往路のSHIRASE（しらせ）で海底にセットし、復路で回収する予定だったのですが、帰りに設置点に寄るとそれがなくなっていたんです。

坂元：ええっ！何が起こったのですか？

原田：詳しい原因は分からないのですが、大きな冰山などにさらわれてしまったのかもしれない。なので第66次の今回は、33年前のリベンジをしたいと思っています。

坂元：先生の研究を通してどのようなことが分かるのでしょうか？

原田：現在、大気中の二酸化炭素(CO₂)増加が問題となっていますが、この半分ぐらいは海が吸収しているといわれています。そのメカニズムとして、今説明したような植物プランクトンの光合成による吸収(生物ポンプ)、そして海水への物理的な溶解があります。私はこの前者を定量的に明らかにしていきたいと考えています。

坂元：南極地域観測における夏隊と越冬隊の役割の違いについて教えてください。

原田：夏隊の場合、例えば南極大陸の野外の調査に出かけるとか、SHIRASE（しらせ）を使って海中のサンプルを採取する海洋観測を行うとか、その夏の期間だけに特化した観測を行います。越冬隊は気象観測、CO₂モニタリングなどの監視観測的な内容が多いです。

坂元：先生が南極に行こう、南極地域観測隊の仕事を始めようと決意されたきっかけは何ですか？

原田：学生時代に私の卒論の指導をしてくださっていた先生が南極地域観測経験のある方で、その先生から南極の魅力や野外調査のおもしろさを教えていただいたことです。また、高校生の頃、教育実習に来ていた卒業生からアースサイエンスという分野について教わったこともきっかけの一つです。人との出会いが重要だと感じた経験でした。

坂元：大学在学中から南極に行こうと考えていたのですか？

原田：大学院修士2年の頃、海洋学の指導教官に海洋フィールド調査に行かせてほしいと頼み込み、初めて海洋観測航海に行ったのが赤道でした。そこで「やっぱり船っておもしろいな」「赤道もおもしろいな」と実感しました。ただ、南極に行けるかどうかはもちろんその頃は分かりませんし、いつかその夢が果たせればよいぐらいにしか思っていませんでした。

南極で経験した「無音の世界」

坂元：先生がかつて南極で経験されたという「無音の世界」について、そのときのご様子などをお話いただけますか？

私
の
場
合
は
南
極
の
景
色
よ
り
も、
音
が
し
な
い
と
い
う
こ
と
に
感
動
を
覚
え
ま
し
た
ね。



● 原田尚美(はらだ・なほみ)
東京大学 大気海洋研究所附属国際・地域連携研究センター教授、国立研究開発法人海洋研究開発機構 地球環境部門・招聘上席研究員。北海道苫小牧市出身。博士(理学)。専門は生物地球化学。北太平洋高緯度域の海底堆積物に記録された過去10万年の海洋環境変遷を明らかにする研究、北極海の海水減少に伴う海洋生物の生産や生態系の応答を明らかにする研究、南大洋の海洋物質循環を明らかにする研究などを実施してきた。名古屋大学大学院博士課程1年のとき第33次南極地域観測隊に初めて参加して以来、極域の魅力にはまり、2024年12月第66次南極地域観測隊長兼夏隊長として3回目の南極を目指す。

原田：風がビュービュー吹いていればもちろん風の音がするわけですが、その風がやんだときに「あれ、なんか何も音がしないな」と初めて気が付いたんです。我々は生活の中で無意識のうちに何かしらの音に囲まれています。電子音もそうですし、虫や鳥の鳴き声もそうです。しかし南極に虫はいませんし、鳴き声を立てるような鳥も多くはいません。なので、周辺に人工物がない場所で風がやむと、ほんとうに音がなくなってしまうのです。あまりにも静かすぎて耳鳴りがするような、なんとも言えない感覚です。

坂元：不思議な体験ですね。

原田：南極の景色はいろいろな写真や映像で見っていたので、それらと一緒にだと思ったのですが、音に関しては現地で初めて気が付きました。私の場合は南極の景色よりも、音がしないということに感動を覚えましたね。

坂元：私は仕事柄、無響室に入った経験がありますが、その環境を居心地よく感じたことはありません。南極の音のない世界はいかがでしたか？



取材は2024年7月11日、東京大学 大気海洋研究所で行われた

原田：屋外でしたので、不思議と気持ち悪くは感じませんでした。何かに囲まれているわけでもなく開放的で、自分の心臓の音が聞こえてしまうのではないかと思うぐらいでした。
坂元：私たちはいやがおうでも音のある世界に生きています。人間の聴力が落ちる原因の一つに、ノイズを聞かなくてもよいよう自ら聴力を閉ざしてしまうことがあるそうです。都会や開発が進んだ場所に住むこと自体が、体中のさまざまな器官へのストレスになっているのかもしれない。
原田：もし南極のような音のない環境を経験しながら生活していたら、「無音の世界」への感じ方も変わっていたでしょうね。

気晴らしはクラブ活動

坂元：南極での滞在中は、どのようなことが気晴らしになりますか？
原田：食事はやはり最も楽しみなことになります。夏の期間中は基本的に自衛隊の方が全員分の食事を作ってくれます。
坂元：そうなんですね！ところで、先生はふだん音楽を聴かれますか？
原田：それが全く聴かないんです。
坂元：全く!？
原田：南極地域観測隊には音楽好きの方が多いようです。クラシック音楽が好きなら、軽音楽のような楽器を弾く方もいます。ただ私は全くだめで、学校で合唱やリコーダー、鍵盤ハーモニカを演奏した程度です。申し訳ありません(笑)。
坂元：いえいえ(笑)。歌を歌う方もいますか？
原田：います。前回の第60次の観測隊では三味線教室を開いている方もいました。やはり音楽は趣味の世界における代表格だと思います。
坂元：音楽以外の活動もありますか？
原田：植物を育てる「農協」や、釣りを楽しむ「漁協」、また天文クラブはオーロラや星の観察をしています。人によっては複数のクラブ活動に入っています。
坂元：ホームシックにかかる方もいらっしゃるかと思います。

原田：そういうときはみんなで元気付けながら、たまに1人になる時間をつくるようにしています。1人になれないというのも南極特有の事情で、越冬隊は個室を与えられているためそこに逃げ込めば一応1人にはなれるのですが、4畳1間の壁の非常に薄い部屋で、1人とは感じ

じづらい環境です。また、1人でいることが命の危険につながらないとも限らないので、1日1回は必ず点呼をしています。
坂元：そのような環境下で4か月を過ごすのは大変ですね……。
原田：夏の期間は忙しく過ぎていくので大丈夫ですが、問題は太陽の出ない季節が2か月ほど続く越冬期間中です。夏季に太陽の沈まない日が続く「白夜」、冬季に太陽の昇らない「極夜」があり、この「極夜」の期間中にメンタルを削られてしまう方がいらっしゃいます。こうしたときの気晴らしとして、みんなで外に出て運動したり、サッカーなどのスポーツ大会を開いたりしています。

坂元：外といっても寒そうですね。
原田：ブリザードなどの暴風さえ吹いていなければ、真冬でも屋外での活動は可能です。外気温は最低でも−30〜40度ぐらい。内陸に行けば−50〜60度になることもあります。昭和基地は沿岸なので比較的暖かです。

「南極授業」による次世代の育成

坂元：今回初めて知って驚いたのが「南極授業」の取り組みです。極地の科学や観測に興味をもっている現職教員を募集して、実際に南極に派遣するという一大プロジェクトですね。
原田：もう10年以上継続している活動です。南極・昭和基地と日本の学校を中継でつなぎ、現地から授業も行います。第60次に同行された教員は、生徒に南極授業を受けて感じたことを芸術で表現させるという授業をしていました。2名の枠に毎年40名以上の応募があるので、倍率は20倍かそれ以上だと思います。
坂元：事前の冬季訓練など大変なこともあるでしょうが、子どもたちは喜ぶでしょうね。
原田：とても喜ぶます。自分たちの先生が南極にいて、南極からじかにライブで授業をしてくれる。日本にいる子どもたちは目を輝かせて授業を受けていました。
坂元：南極授業は、もともとどういった発想から生まれたプ

ロジェクトでしょうか？

原田：南極地域観測隊の次世代の育成です。南極授業を受けた子どもたちの中から、次世代の観測隊員を1人でも多く輩出したいという国立極地研究所スタッフの考えです。徐々にではありますが、南極授業を受けて研究者の道へ進む人も増えています。

坂元：南極授業の他にも何か一般に向けた啓蒙活動などはありますか？

原田：越冬期間中に越冬隊員が自分とゆかりのある学校に南極から中継授業をしたり、南極から戻ったあと南極授業を行った教員自身の体験を学校以外の場で講義されたりすることはあります。学校の教員はお話が上手ですので、啓蒙活動として先生方にお話ししていただくのはたいへん効果があると思います。

研究のバトンを次の世代につなぐ

坂元：加速度的に地球温暖化が進む昨今、先生のご研究を通して今後の地球環境の見通しや対策などについてどのようにお考えでしょうか？

原田：極域、特に北極海は海水の減少という形で、地球温暖化の影響を最も敏感に感じやすい地域です。南極でも2015年ぐらいから急激に南極大陸周辺の海水が減り始め、2023年には海水の発達する冬季に海水面積の最小値を記録しました。南極大陸の上には氷床として淡水がのっかっており、その周辺をせき止めている海水がなくなることで、氷床が融け出す可能性があります。それがほんの少量でも、世界の海面を平均1〜2m上昇させてしまうような膨大な淡水を南極大陸はもっています。世界の大都市は海拔0mの地域が多く、東京、名古屋、大阪も例外ではありません。我々が暮らしている地域を含め、今後は地球温暖化を見据えた都市計画を立てていかなければならない時代がくるのではと思っています。
坂元：淡水をせき止めている場所は分かっているのですか？
原田：何か所かあるうち、日本の観測隊が発見した重要なエリアがあって、そこを今回も集中的に観測します。温かい海水が海水を下から温め融解を加速させている可能性を突き止めたのです。温かい海水が海水を下から削るという、非常に危険な状況は今でも続いています。海水が減り、氷床(淡水)をせき止めていたコルク栓が抜けるとどうなるかというと、海面の上昇を全球で引き起こします。ですので、こうした監視観測を続けることがたいへん重要なのです。衛星観測は海洋表面のデータしか観測できません。海の中

で起きていることは衛星観測では分からないので、実際に現地に赴き現場観測することの重要性を感じています。今日のような取材の機会を通して、地球温暖化の実情をいろいろな方に知っていただければうれしく思います。

坂元：ほんとうに大事な研究ですね。こういった課題については、諸外国との連携も行われているのでしょうか？

原田：残念ながら、第66次で南極へ行く隊員の中に外国の方はごくわずかです。私たちが相手にしているのはグローバルな地球規模の課題ですので、実際に現地に行っても、国外の研究者との連携研究などは盛んに行われています。

坂元：それらを組み合わせて一つの形にしていこうということですね。最後に、この記事を読む全国の子どもたちや先生方に向けてメッセージをお願いします。

原田：ここまで述べてきたようなことに少しでも興味があれば、ぜひとも研究者の道を考えてほしいと思います。私たちのように地球を相手にする研究は息が長いものです。現役で研究に携わっている間は、何も変化は起こらないかもしれない。でも、この研究のバトンを次の世代につなげていき、環境の変化をしっかり捉えていってほしいと思います。地球環境や気候変動に少しでも貢献できるような道を、将来の進路の一つに考えてもらえたらうれしいです。
坂元：先生がおっしゃるようなスケールの大きなもの見方や、世界を取り巻く課題への興味・関心が、より多くの人たちへと広がっていったらいいですね。
原田：私がこの道に進むきっかけとなったのは人との出会いでした。よき師との出会いが今の私をつくっています。ですので、私自身もこの道を進む人たちにとってそのような存在でありたいと願っています。私の恩師はほんとうに楽しそうに研究に取り組んでいらっしゃいました。楽しいことを職業にできるなんて、こんなにすばらしいことはありません。何かを教えるというよりも、私が現場で楽しんでいる姿を学生たちに見せていきたいと思っています。





カトカトーンの使い方を解説する田川先生

Ask the teacher

授業者に訊く①

ほうき
伯耆町立
溝口小学校



田川良久先生(授業者)と藤井浩基先生(聞き手)

今回の「授業者に訊く①」でご紹介するのは、鳥取県伯耆町立溝口小学校5年生のカトカトーン[☆]を用いた音楽づくりの授業です。児童は各自のタブレット端末(Chromebook)を慣れた様子で操作し、音の入力を進めます。つくった音楽を互いに聴き合い、楽しみながら音楽づくりに取り組む姿が印象的でした。

授業者: 田川良久 (伯耆町立溝口小学校 教諭)

聞き手: 藤井浩基 (鳥根大学 教授)

本時の授業の位置付け

異なる楽器の音色が重なり合う響きを味わう学習のまとめとして、自分の性格を表すジングル*をつくるという目標に向け、児童の思いを生かした「ラーニング・マウンテン**」を設定した。音楽づくりにカトカトーンを活用したのは、演奏技術に自信のない児童でも、自分のイメージする音楽を工夫しながら形にできるという利点があったからである。出来上がったジングルは、帰りの会など学校生活の場面で使用し、作品を生活の中に生かしていくことを最終的なゴールとしている。DTM(デスクトップミュージック)のよさと、実際に演奏する楽しさの両方を味わうことを目指す。

* テレビやラジオのコマーシャルに使われる短い音楽。

** Learning・Mountainは、子どもの側に立って学びの全体を俯瞰的に捉え、共有するものである。各教科等における領域や題材のまとまりとして捉えることもできる。(『個別最適な学び・協働的な学びを実現する「学びの文脈」』榊山敏郎著 明治図書より)

本題材の授業の流れ

次	教材	時	学習の内容・学習活動
1	リボンのおどり(ラバンバ)	1	ラーニング・マウンテンの作成。各パートの旋律の特徴を捉える
		2	重なり合う響きの変化のおもしろさを生かし、表現の工夫をする
		3	グループで工夫した合奏を発表し合う
2	祝典序曲	4	主な旋律、楽器の音色を感じ取って鑑賞する
		5	楽器の音の重なりや、響きの変化を味わいながら鑑賞する
3	打楽器でリズムアンサンブル	6	いろいろな楽器の音の響きや、音色の組み合わせを楽しむ
		7	リズムパターンを組み合わせ、4小節のリズムアンサンブルをつくる
		8(本時)	リズムアンサンブルに旋律を加え、自分の性格を表すジングルをつくる
		導入	○ カトカトーンを活用した音楽づくりの手順を説明する 楽器選び、音階の設定、旋律づくり
		展開	○ 自分の性格を表すジングルをつくる ○ 完成したジングルを発表し合い、意見を交換する
まとめ	○ 本時の振り返りを Google Classroom にまとめる		

☆ カトカトーンについて → <https://www.kyogei.co.jp/katatone/>

「カトカトーン」を活用したジングルづくり

音楽の授業における ICT の役割

藤井: 教室に入ってくる児童の足取りが前向きで、音楽の授業を楽しみにしているという気持ちが体の動きからも伝わってきました。先生の言葉掛けにもはっきりとしたリアクションがあり落ち着いていて、田川先生が児童一人一人にしっかりと目を配られているのがよく分かりました。

田川: ありがとうございます。前学年のときから意欲的な児童が多く、音楽に限らずさまざまな教科活動へ積極的に取り組んでいます。今日は音楽づくりだったので他の児童と意見を聞き合うシーンが少なかったのですが、グループ学習の好きな子が多いので、機会があればそういった活動も取り入れたいと思っています。

藤井: 事前にいただいた指導案によると、8時間計画の中の第1次で器楽、第2次で鑑賞、そして今回の第3次で音楽づくりに取り組まれています。1つの題材としては長丁場になりますが、今日に至るプロセスの中で、子どもたちに対して何か感じられたことはありますか。



田川: 器楽はやはり得意な子とそうでない子がいます。『リボンのおどり(ラバンバ)』のリズムがうまく打てなかったり、他の児童とテンポが合わなかったりするなどさまざまです。しかし、負の感情を抱いたまま次の題材についてほしくないし、どこかで「うまくいった」「音楽に参加して楽しかった」という経験をしてほしい。音楽づくりには、そういった児童を支援する役割もあると思っています。ICTは、音楽の苦手な児童が、みんなと同じように音を重ねたり響きを味わったりすることのできる重要なツールなのです。

前時までの活動を音楽づくりに生かす

藤井: 授業を拝見して、児童のつくった作品がラテン調に仕上がっていたのが印象的でした。おそらく彼らは意識的にそのようにつくろうとしたのではなく、第1次で学習した『リボンのおどり(ラバンバ)』が耳に残っていて、ああいった曲ができたのだろうと思います。前時までに学習した内容が生きているのではないのでしょうか。

田川: 第3次の前半にリズムアンサンブルづくりを行ったのですが、児童は教科書の「打楽器でリズムアンサンブル」に示されているリズムに加え、そ



授業の始まりと終わりに歌唱する様子



音楽づくりの手順を説明する田川先生



「機能制限」を使って入力画面に表示する音を設定する



つくった音楽を互いに聴き合いながら音楽づくりを進める児童

れまでに学習した他のリズムも取り入れながら、工夫して音楽づくりに取り組んでいました。曲の終わり方も一人一人違ってましたよね。

藤井：第2次の鑑賞でショスタコービチ作曲の『祝典序曲』を鑑賞しています。第1次の『リボンのおどり(ラバンバ)』とは全く異なる雰囲気楽曲ですが、『祝典序曲』を学習したときの児童の反応はいかがでしたか。

田川：最後のほうで金管楽器が重なり、響きに厚みが増して盛り上がるところが好評でした。時間があつたので、別のオーケストラや吹奏楽による演奏も聴かせたところ、児童はそれぞれのよさを感じ取りながら、音の重なりや響

きの違いを楽しんで聴いていました。これらの学習が音楽づくりにも生きていたらよいと思います。

藤井：本日、田川先生がカトカトーン楽器選択画面を操作しながら「何の楽器がいい？」と児童へ問い掛けられた場面で、すぐに「ホルン」などの楽器名が出てきたことに驚きました。音楽づくりの際に「音を重ねていいですか」と発言していた児童もおり、『祝典序曲』やそれまでに学習した内容が、その次の学びにしっかりと生かされていると感じました。

音楽を視覚的に捉える

藤井：児童がカトカトーンを操作しているところを見せていただき、やはり子どもはのみ込みが早いと実感しました。おもしろかったのが、「機能制限」の説明のときに先生が入力画面の黒鍵を消して見せられた場面です。魔法のようで、児童の興味が一気に画面に引き付けられたのが分かりました。

田川：昨年、彼らが4年生のときに日本の音階を授業で取り上げました。当時はカトカトーンの試験公開版を使っていたのですが、「機能制限」が未実装だったため、押したい音の隣に指があたってしまったり、音階に含まれない音を入力してしまったりして苦労したんです。なので、

正式版がリリースされ、使える鍵盤をうまくこちらで制限できるようになったのはとてもありがたいことです。

藤井：実際の楽器では使わない鍵盤を消すことができませんから、このような機能を使うことで児童が音楽づくりへスムーズにアプローチできるようになると思います。先生や児童が初めてカトカトーンを使ったときの印象はいかがでしたか。

田川：一般的なDTMソフトと比べ、直感的に操作できるのが大きなポイントです。打ち込み画面に音符が出てこず、四角いマスに音を埋めていくシンプルな操作方法が視覚的にも分かりやすいと感じました。ICTのスキルが一人一人違うのでやはり苦勞する児童もいますが、友達どうして教え合いながら日々スキルを向上させています。

藤井：カトカトーンを授業で活用する中で特に効果的だと感じた経験はありますか。

田川：2年生の『かえるのがっしょう』の授業で使ってみたときのことです。教師が打ち込んだ入力画面を前方に提示することで、児童はメロディーの動きを視覚的に捉えられるようになりました。子どもにとって楽譜を見て音楽を判断するのは容易ではありません。演奏の得意な子ならできるかもしれませんが、楽譜を見ることに慣れていない子は、音楽を形や模様(パターン)として捉えることを通して、音の重なりや動きを視覚的に理解できるようになると思います。

DTMを通して、より豊かな音楽体験を

藤井：つくった音楽を自分で再生できるのも大きなポイントですね。本日の授業で印象的だったのが、授業で使わない部屋を活用して「自分のタブレットの音が聴こえなかったら静かなほうに行ってもいいよ」というように、空間をうまく使い分けていた点です。こうした活動ではイヤホンを使うことが多いと思いますが、イヤホンを付けると自分の世界に入り込んでしまふんですよね。逆に、あまり密になりすぎると今度は自分の音が聴こえなくなってしまう。自分の音を聴く一方で友達の音も少しずつ耳に入ってくる。それも「いろいろな音のひびきを味わう」醍醐味だと思うんです。

田川：漏れ聴こえてくる音もヒントになりますよね。教室が狭いと他の音が気になってどうしようもなくなってしまふますが、使える空間をうまく活用することで、音楽づくりの幅が広がると思います。

藤井：ラテン調の音楽をつくった児童の中には音楽づくりの間、自然と体が動いている様子も見受けられました。自分の心地よい速さや響き、こうした、ああしたいという思いがないと体は動かないので、それらを自分で見つけて試行錯誤できるというのはすばらしいことだと思います。

田川：これからの時代、DTMは音楽表現における重要なツールになっていくと考えています。児童は日頃からポーカーイドなどに接しているため、電子音によって自ら音楽を楽しむ経験が大人よりもできていると思います。しかし、できれば電子音にとどまらず、カトカトーンを用いた音楽づくりや、音

楽によって体を動かす活動を通して、より豊かな音楽体験をしてほしいというのがいちばんの願いです。

藤井：こうした手ごたえを第1次で感じた児童もいれば、もう少しと思った児童もいると思います。本時の授業が2学期、3学期の学習へとさらにつながっていくことを期待します。

つくった音楽を学校生活の中に生かす

藤井：本時の活動中、先生がファイルを保存するよう繰り返し指示されていましたが、これまでに保存のし忘れによるアクシデントやエラーなどはありましたか。

田川：ICT機器の使い方がある程度学級でも指導していますので、決定的なアクシデントやエラーなどは今のところありません。名前を変えれば複数保存することができ、いざというときリカバリーがきくため、頻繁に保存する



○ 藤井浩基(ふじい・こうき) 島根大学 教授

ことは大事だと思います。

藤井：授業の最後に、Google Classroomによる振り返りシートを電子黒板に投影しておりましたが、他の児童の感想をリアルタイムで見ることができたのでとても便利です。通常は子どもたちの発言に時間がかかり、振り返りに長い時間を取れないと思います。意見の共有に時間をかけず、最後のチャイムが鳴ると同時に鮮やかに授業を終えられたのが印象的でした。

田川：振り返りシートを電子黒板に投影することで個々の入力したものが目



「そのテンポがいい?」「もう一つ楽器を重ねてみていいかもね」と、活動中も児童へ声掛けをする

○ 田川良久(たがわ・よしひさ) 伯耆町立溝口小学校 教諭



つくったジングルを全員で聴き合う

に見えるようになり、「こういうことを書けばいいんだ」「こういう振り返りだったら自分も書けそう」というような入力の手助けになります。タブレットを導入してからは、そういうところが少し楽になったかなと思います。時間ぴったりに授業を終わらせるというのは本校の教師みんなが心掛けていることで、自然と児童にも時間に気を配る習慣が生まれます。

藤井: 完成したジングルを学校生活の中に生かす取り組みは、たいへん魅力的に感じました。「生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる」ために、日々音楽の授業の中でさまざまなアプローチがなされていますが、学校生活の中で自分のつくったものが使われるという経験は、子どもたち自身の存在感や自己肯定感を高めることに非常に効果的だと思います。

田川: 音楽づくりでは、完成した音楽がその場限りになってしまうことが多いものです。そんな中、できるだけ自分のつくったものに誇りをもってほしいし、大切に思ってもらいたいと感じています。以前から児童のつくったジングルを帰りの会や給食の時間などに流したいとは常々思っていました。カトカトーンはつくった音楽を音声ファイル

として保存することができます。それを再生したり操作したりする環境が整っていたことも、本時のねらいの設定につながっていききました。

藤井: 授業後半の作品発表の際、つくったジングルがその人の性格を表しているかどうかを先生が問い掛けられた場面で、児童はみんな「表している」と答えていましたよね。音楽は、個性や人となりを表現することができます。それは、理論を学んだからとか、テクニックやスキルを身に付けたからということではなく、一人一人の声が違う

ように、その人の内面的なものが自然と出てくるからです。「自分の性格を表すジングルをつくる」という本時のテーマを、児童一人一人が納得したうえで授業を終えられたことは何よりだと思います。

田川: 児童はほんとうに楽しんで音楽づくりに取り組んでいました。それがまずはいちばんです。ICTは児童が楽しみながら音楽に取り組んでいくための一つの方法や手段であり、本物の音楽、自分がやりたい音楽につなげていくための重要なツールだと思います。

校長先生より

本校は「立志」「敬愛」「研学」という校訓のもと、それぞれ、志を立てる子(心づくり)、ともに学ぶ子(仲間づくり)、自らを鍛える子(学びづくり)の育成を目指す、ラーニング・マウンテンを学校経営のグランドデザインとしています。「自主と自治の力で いつでも どこでもだれにでも」、「気づき考え 自ら行動 みんなで伸びる 教師と子ども」を合い言葉に、やってよかった、もっとやりたいという児童の思いを育むため、「ふるさとを愛し やさしく かしく たくましく生きる児童の育成」を学校教育目

標に掲げています。

田川先生は2年前まで県指定のエキスパート教員の認定を受け、その後も、本校においては音楽科全学年を系統的に指導しています。この度の公開授業が全国の音楽科、ならびに他教科を含む若手の先生方への授業のヒントとなることを願っております。



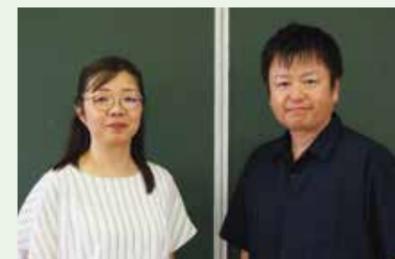
幅田典代先生
伯耆町立溝口小学校 校長



教科書の二次元コードコンテンツを使った旋律の作り方を説明する

授業者に 訊く 2

福井市文殊小学校



竹内隆子先生(授業者)と湯澤卓先生(聞き手)

次にご紹介するのは、福井県福井市文殊小学校6年生の音楽づくりの授業です。教科書の二次元コードコンテンツを活用した本授業では、熱心にタブレット端末を操作して旋律をつくる姿や、ペアで積極的に意見を交わす場面など、生き生きと取り組む子どもたちの様子が見られました。対談では、竹内隆子先生が授業で大切にされていることなどについて、お話を伺いました。

授業者: 竹内隆子 (福井市文殊小学校 教諭)

聞き手: 湯澤卓 (富山国際大学 講師)

本時の授業の位置付け

題材「和音のひびきや音の重なりを感じ取ろう」

教材『『雨のうた』の和音で旋律づくり』 題材の第4時(全6時間)

→その後、総合的な学習の時間「文殊をPRする動画をつくろう」のBGMづくりへ大切にしたこと

- つくった旋律や、つなぎ方・重ね方に関して、常にペアで意見を交わす。
- つなぎ方を考える際に、音の高さや旋律の動きに着目する。
- 旋律をつなげたり重ねたりするおもしろさを感じる。

授業の流れ

学習の内容・学習活動	
導入	<ul style="list-style-type: none"> ○学習課題を確認し、「雨のうた」の和音(イ短調)で、旋律づくりを行う。 ・教科書の二次元コードコンテンツを利用し、まずは1人で4小節の旋律をつくる。 ・5年生の教材「静かにねむれ」の和音(ハ長調)での旋律の作り方と同じであることを確認する。
展開	<ul style="list-style-type: none"> ○旋律を紹介し合っ中で、出てきた意見を取り上げ、全体で共有する。 ・ペアで、互いのつくった旋律を聴き合い、意見を交わしながら思いを伝え合う。 ・最初につくった旋律と、ペアから出た意見で変えた旋律を比べる。 ◎つくった2つの旋律をつなげたり重ねたりする。(二次元コードコンテンツの続き) ・昨年の既習事項を思い出し、旋律のつなぎ方について考える。 ・ペアで何度も聴いて、つなぐ順番を考えたり、音の高さを調整したりする。 ・8小節(4小節×2回)をつくるが、ペアによっては16小節(4小節×4回)まで考えてもよい。 ○つくった旋律を紹介する。(下記の3ペアを紹介) ・「前後を考えながらつなぐ」「旋律を重ねる」「16小節+終止音まで考える」
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ○いろいろなつなぎ方・重ね方があることに触れ、次時以降の予告をする。 ・次時は、つなげて重ねて「16小節+終止音」の旋律をペアで考える。 ・リズムも変えてよいことを伝える。(その場合は、別のアプリを使用)

目の前の子どもとつくる授業



全てのペアに声を掛けながら、旋律づくりを一緒に楽しむ竹内先生

すなおで歌の好きな子どもたち

湯澤：子ども一人一人と向き合っていることが伝わるすばらしい授業でした。昨年はこのクラスの担任をされていたと伺いましたが、音楽の授業を通して、先生の感じるこのクラスのよさはどういうところですか？

竹内：このクラスだけではなく、この

学校の子どもたち全般にいえることですが、とてもすなおな子どもが多いです。私がこれまで経験した小学校の子どもたちとあまりにも違うので驚いたほどです。ただ、最初は少しおとなしいなという印象がありました。特に今まではコロナ禍だったこともあって、あまり歌わない、演奏しないという授業ばかりで、音楽的な経験が少ないし、私が赴任する前は音楽専門の教師はいなかったもので、そういうことも影響していたのかなと思います。知らないことが多い分、吸収する力もすごくて、1年間を通して、こんなこともあんなこともできると子どもたちといろいろ挑戦したら、メキメキと成長して、今では積極的な子が増えてきましたね。

湯澤：特に印象的な姿を教えてくださいませんか？

竹内：この子たちは特に歌が好きで、昨年は給食の時間にずっと合唱曲を流していました。すると、子どもたちが自ら好きな曲を見つけてきたり、朝の会や授業で歌ったりし始めたのです。それをきっかけとして、とにかくたくさん

曲を歌いました。歌えば歌うほど、「もっと歌いたい」という声が高まり、今まで取り組んだことのない雰囲気の歌にも挑戦するようになりました。音楽を楽しみながら、自分の殻を破ろうとしているのかなと思います。

湯澤：竹内先生自身が音楽を身近な存在としていることが子どもたちの姿につながっているのですね。

生活に生かす授業づくり

湯澤：本日の授業は、45分という限られた時間の中で、子どもたちの活動がしっかり保証されていると感じました。構成が計算され、しっかりとレイアウトされていた印象を受けます。

竹内：ありがとうございます。

湯澤：「よい授業」を考えるにあたって、時間配分は重要です。特に冒頭、いわゆる「導入」の時間配分に私は現在注目しています。今日、先生が授業の始めに話されていた時間は8分弱でした。

竹内：8分もしゃべっていませんか！

湯澤：はい。これはかなり短いです。授業開始からではなく子どもたちが入ってきてからの時間ですから。先生が子どもたちに、今日の学習の流れを短い時間でとても的確に説明されていた証拠です。こうした時間配分ができるのは、先生自身の中にぶれない授業づくりの視点があるからだと思いますが、そのあたりはいかがですか？

竹内：そうですね、いつも悩みながらですが……授業づくりの視点でいうと、子どもたちに何を体験させたいか、学ばせたいかという部分はぶれないように構成しています。内容はなるべく生活と関わりのあるものにしたと思っています。今回は前提として、総合的な学習の時間に、地域をPRする動画づくりを行うことが決まっていた

ので、せっかくだからBGMも自分たちでつくって地元のよさをもっと表現できたらと考えたのが始まりです。偶然にも、この学校で長年演奏し、受け継いでいる「文殊伝説」という曲が短調だったので、今年度から教科書に掲載された、この旋律づくりの教材で体験するのがちょうどいいとなったわけです。

湯澤：そうした地域の中に根付いているものと関連付けていることが、今回の音楽づくりの目指す方向性につながっているということですね。

竹内：音楽づくりの活動では、音楽をつくって授業中に披露するだけになりがちなので、「作曲家になるわけでもないのに、なんで作曲の勉強をするのだろう」と感じてしまいがちですが、つくった音楽を生活と密着させることで、必然的な学習や授業につなげていけたらいいなと思っています。

教育の原点は、幼稚園での経験

湯澤：授業の中で、子どもの発言から学習の方向性を紡ぎ出そうとしていらっしゃるのが印象的でしたが、ふだんの授業でも意識されていますか？

竹内：そうですね。頭の中で授業の流れをつくっていても、子どもたちの反応はそのときにならないと分かりませんし、こちらが予想しない発言もあるので、それに合わせて授業を変えていくことは意識しています。特に音楽の苦手な子が少しでも意欲的になれたらいいなという思いで、できるだけ子ども一人一人の声を拾うようにしています。

湯澤：授業の中で取り残される子どもがいないように、先生が一人一人と目を合わせて声を掛けている様子が印象的でした。そのスタンスがあったかい学級づくりにつながっているのだと思います。子ども一人一人を大事にするのは簡単ではないと思いますが、それはこれまでの経験で培われたものなのでしょうか？

竹内：おそらく、幼稚園での指導経験が生きていると思います。一人一人の興味・関心や成長に合わせて教師が支援していくというのが幼稚園なんです。子どもたちがいろいろなことを体験して、その積み重ねの中から生まれる自発的な学びを教師と一緒にやって応援する。それまで私が経験してきた



○竹内隆子(たけうち・たかこ)
福井市文殊小学校 教諭

学校での学びとは異なる世界を経験したときに、強い感銘を受けたんです。けれども、小学校に上がると、急にみんな一律で学んでいくことが増えますよね。教えるべき内容があって、ある程度到達しなくてはいけない学習目標もあるので難しいのですが、幼稚園での指導の姿勢は忘れてたくないなと思っています。クラス全員が同じねらいに到達できればいいのですが、そうでなくても、その子なりに「今日はこれができた」とか、「ちょっと楽しかった」とか、それぞれの経験から見つけた学びをいつも感じてほしいなと思っています。それは音楽以外の授業でも同じですね。



○湯澤 卓(ゆざわ・たく)
富山国際大学 講師



タブレット端末を使って自分の旋律をつくる

ICTのよさを生かした「ハイブリッド」な活用

湯澤：今回は、教科書の二次元コードコンテンツを使った音楽づくりですが、音楽の授業でICTを活用してみて、どのようなことを感じますか？

竹内：やはり便利だなと実感します。子どもたちに何かを提示するにしても、子どもたちが活動するにしても、さっ

と行えて学習がスムーズに進むので、短時間で学びを見つけられることが多いと思います。

湯澤：今日、実際に旋律をつくっている間も、互いの音を聴きながら「これはいい」とか「これはよくない」という言葉が子どもたちからけっこう出てきましたよね。そういう判断の基準について、先生から見て気付くことはありますか？

竹内：例えば、同じ音が続くのは単調だと感じる子どもが多いみたいです。以前、音楽づくりの授業を行った際は、演奏しながらつくるようにしていましたが、そうすると、演奏が苦手な子は音を選ぶときに跳躍した音やシャープの音を避けてしまうようだったので、今回は演奏しなくてもよいと伝えたところ、「やった！それならで

きる！」と言っていたんです。子どもたちとしては、もっといろいろな高さの音を使った旋律にしたいのだろうなと感じました。

湯澤：そういった面でも、ICTを使うことは、子どもたちにとって充実した活動につながるのですね。

竹内：演奏するとなると、それ自体に一生懸命になり、自分のつくった旋律がほんとうにそれでいいのかということに気が回らなくなってしまいます。でも、こういうコンテンツを使えば簡単に聴くことができ、「ちょっとおかしいかな」とか「こっちのほうがいいかな」と感じられるみたいなので、やはりそこがデジタルのよさなのだと思います。あとは、今日の授業でも使いましたが、イヤホンを付けると自分の音だけに集中できるので、それ

ぞれのテンポで進められるところも魅力的ですね。

湯澤：感覚的にでもそういう気付きがあったり、それぞれに合った習熟や進度でできるようになったりするということでは、とても有効性が高いですね。

竹内：ただ最終的には、機械の音ではなく、生音で演奏してほしいと思っています。今日の場合は、音楽をつなげたり重ねたりすることが目標だったので、演奏できなくてもよいのですが、そればかりに頼るのではなく、最後は自分自身で音楽を表現し、それをみんなと共有することも大事にしたいので、ハイブリッドで活用していくことが必要かなと思います。

湯澤：そうですね。先生がおっしゃったように、ICTを活用することによって学習がスムーズになり、授業がぐっ



ペアで互いのつくった旋律を聴き合い、感想やアドバイスを伝え合う



旋律のつなぎ方の工夫について、全体で共有する

と効率的になりました。「覚える」ことに時間をかけるのではなく、知った情報を活用して学びを広げたり、さまざまな体験をしたりすることに、より多くの時間を使えるようになったと思います。ですので、先生がおっしゃるハイブリッドという視点はすごく重要だと感じます。

子どもたちの心に残る授業を

湯澤：今回のまとめとして伺いますが、音楽の授業をするうえで、先生がいちばん大事にしていることはなんですか？

竹内：やっぱり目の前の子どもですね。授業の場で子どもがどんな状態なのかを見取って、それに合わせて学習内容を柔軟に変更したり、クラスによって全然違うところから切り込んでいったりするようにしてきました。それがまず根底にあって、そのうえで、どんな子どもでも楽しめる授業にしていきたいと思っています。例えば、授業が終わって教室へ戻った子が授業で歌った曲を口ずさんでいたとか、ほんのささいな会話に授業での楽曲の話題が出たら、印象に残ったんだと思えてうれしいですね。

湯澤：先ほどおっしゃっていた幼稚園でのご経験ともつながる話ですね。やはり、子どもたちの心に残る体験をつくり

たい、一緒にその楽しみを分かち合いたいということをずっと大切にされてきたことがこちらにも伝わってきました。

竹内：ありがとうございます。子どもたちには、たくさんのことを体験してもらいたいですし、そこから何か自分だけの気付きを見つけてほしいです。そうやって見つけたことに対しては、どんな小さなことでも「すごいじゃん！」と言ってあげたいなと思っています。

湯澤：とてもすてきなことです。ICTを取り入れて時間を有効活用しつつ、子どもに寄り添いながら体験的な学びを充実させるという先生のスタンスに学ばせていただきました。



対談の様子

校長先生より

本校は、地域のシンボルである文殊山の麓の学校として、地域と関わりながら共に歩んできました。文殊山の歴史にちなんだ学校行事は30年以上続けており、子どもたちも地域を愛し、自ら地域と関わる取り組みを考えて行っています。今回の授業の先にある「文殊をPRする動画づくり」もそうした活動の一つです。いろいろな体験や地域での活動を通して、子どもの感性を豊かに育む教育を目指す中で、竹内先生が赴任されてからは、合唱活動にも取り組んでいます。子どもたちは歌がほんとうに好きで、休み時間になる

と音楽室に集まって歌っています。また、本校のスクールプランでは、目指す教職員の姿の一つとして、「子どもの良さや得意を見出し伸ばす」ことを掲げています。校内だけではなく、校外で活躍している子どもについても積極的に認め、一人一人の頑張りをみんなと共有することを大事にしています。

川崎隆夫先生
福井市文殊小学校 校長



ペアで話し合いながら、つくった旋律をつなげたり重ねたりして、音楽づくりの活動を進める

小学校デジタル教科書活用術 Vol.1

教育芸術社の小学校教科書指導書(令和6年度～)フルセットには、「指導者用デジタル教科書(教材)」が新たに追加されました。授業の中で、デジタル教材をより効果的に取り入れるためにはどうすればよいか、弊社小学校教科書著作者の一人である小梨貴弘先生にポイントを伺いました。今号から2回にわたり、実践に役立つ活用方法をご紹介します。



イラストレーション：橋本金夢

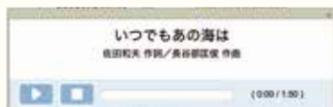
歌唱編

ポイント 複数の音源再生で段階的な学びをサポート

小学生の音楽5「いつでもあの海は」(P.18)



再生



曲全体を聴きたい場合はいちばん左の再生アイコンをクリックすると、簡単に音源が流れます。教科書紙面を見せながら音源を再生することができます。

楽譜



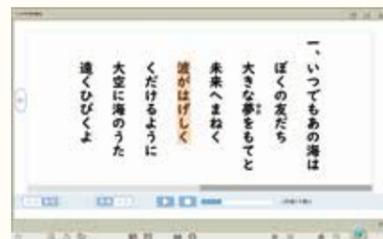
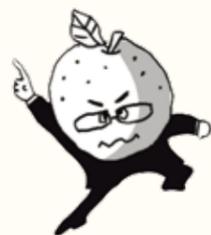
この楽譜アイコンでは、楽譜を見せながら演奏を再生することができます。音源と連動して演奏箇所が示されるので、どこを歌っているのかがひと目でわかります。また、合唱曲の場合、画面左の音声のチェックボックスにチェックを入れることでパート別の音声を聴くことができるほか、画面下中央の楽譜パネルから任意のパートを選択するとそのパートだけの楽譜を表示させることが可能です。

さらにドレミにチェックを入れると、ドレミが表示され、旋律の音の動きを確認しながらドレミで歌うこともできます。

※「指導者用デジタル教科書(教材)」の機能で表示できるドレミは、音名として用いられるドレミを表記しています。



歌う部分が視覚的に分かることで、それぞれのパートの旋律の流れが捉えやすくなるね。



歌詞

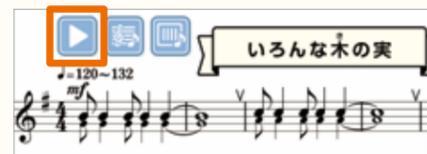


縦書きの歌詞を表示させながら、音源を再生することもできます。言葉そのものに着目させたり、いちばん大切に歌いたいところを考えさせたりする場面では、このコンテンツが有効的です。

実践

こなっしー(小梨先生)は、こう使う

小学生の音楽4「いろんな木の実」(P.22)

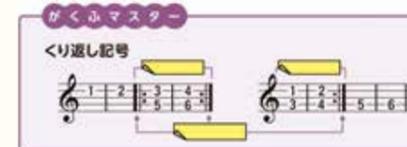


① 曲全体を聴く

私が授業の導入に使うのは、この全体再生。この時点では、子どもたちは手元にある自分の教科書を見ながら音楽を聴きます。

② がくふマスターを活用する

この曲を聴いているとき、子どもたちの視線は楽譜を追いかけてあっちこっちに動きます。まだ学習していない「くり返し記号」とまどうのですね。そこで活用するのが、この「がくふマスター」です。子どもたちには、「楽譜をたどろうとすると、どうして小節を行ったり来たりするのか分かる？」などと問い掛けながら、「実は、その秘密がこの『がくふマスター』ってところに隠れているんだよ。気付いたかな？」と、自然に次の学習へ移行していきます。「指導者用デジタル教科書(教材)」では、記号の名称は付箋で隠されているので、子どもたちと考えながら取り組むこともできます。



③ 楽譜を見ながら歌唱練習する

歌唱に慣れてきたら、次はこの楽譜が表示される再生モードを活用しながら、実際に歌っていきます。歌っている部分がオレンジ色で表示され、楽譜が自動でスクロールしていくのは便利です。やはり、楽譜を見ながらどこを歌っているのが分かるというのは、子どもたちにとって安心感があるようで、とても集中力が高まります。また、先ほど学習した「くり返し記号」に触れることで、曲の流れをよりしっかり意識しながら歌うことも身に付いてきます。



※著作権の都合上、歌詞を省略しています。

動画



④ 動画で楽器の演奏方法を学ぶ

この教材では、楽器の音色や鳴らし方も学習します。ある程度歌えるようになったら、今度は教科書P.23の「リズムばんそうの例」に着目します。この場面で用いるのが、動画再生アイコンです。リズム譜の下にある動画再生アイコンをクリックするだけで、プロの演奏家による正しい演奏方法を学習することができます。また、それぞれの楽器の音色やリズムを聴いて、その特徴について考えるときにも活用できます。

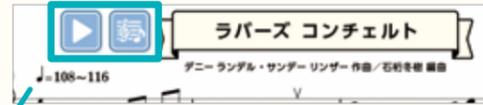


「指導者用デジタル教科書(教材)」を使うと、CDやDVDを入れ替えたり、該当のトラック番号を探して再生したりする時間が大幅に短縮され、効率的に授業を展開できるところが魅力的だね。



ポイント 子どもの学びをサポートする機能が充実

小学生の音楽6「ラバース コンチェルト」(P.18)



器楽教材においても、全体合奏が聴ける再生アイコンと、楽譜を目で追いながらパートごとの音が聴ける楽譜アイコンが有効です。この2つを活用することで、全体を把握したうえでパートごとの旋律の音の動きを捉えるという活動をスムーズに進められます。



この教材では、パートの役割について考える活動を行います。このときにも、楽譜アイコンを活用することができます。ここでは、音源を幾つかのパートに限定して再生することが可能なので、例えば、1のパートと4のパートを重ねたときはどんな響きになるのかについて話し合ったり、そこに3のパートを加えるとどんな違いが生まれるかなどについて意見を交流したりすることができます。段階的にパートを増やしたり減らしたりすることで、パートの役割を理解しやすくなります。



デジタル教材は、学習の広がりをつくったり、実際に演奏するにあたって前段階的な活動を行ったりするのに、とても役立つね。

「カトカトーン」を使った展開の応用例

パートの役割について、ある程度理解することができたら、ここから私は「カトカトーン」を用いた学習に移行します。パートの役割を考えながら、それぞれのパートに合う楽器を子どもたちに選んでもらいます。教材の音を「カトカトーン」で打ち込んだktkファイルをあらかじめ用意しておき、それを配布すれば、子どもたちはその場で「カトカトーン」を使って音源を視聴したり音を編集したりすることができます。約70種類の旋律楽器の音を使用できるので、子どもたちが楽器の音を自由に変更し、すぐにオリジナルの合奏として視聴することができるのは便利です。さらに発展させて、例えば、全て同じような音色にしてみるとどうなるか、アナログの楽器では表現できないような音色を使ってみようなど、いろいろな楽器の組み合わせ方を通して、今までの概念とは異なるものを子どもたちが考え出すこともできるようになると思います。



「カトカトーン」についての詳細はこちらから <https://www.kyogei.co.jp/katokatone/>

その他のサポート機能

小学生の音楽3「きれいなソラシ」(P.27)



リコーダーの教材では、音源の再生に合わせて運指を表示させる機能があります。画面右下のチェックボックスを使えば、運指のイラストの上下を入れ替えたり、表示を消したりすることができます。また、音源の再生速度も変更することができるため、子どもの実態に合わせて、柔軟に学習内容を設定することができます。

Tサポート

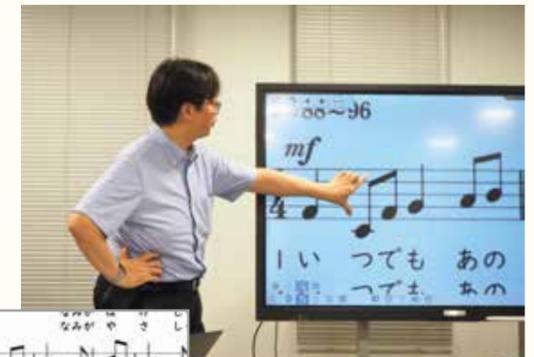


画面下にあるTサポートには、授業に役立つさまざまなコンテンツが備わっています。全ての学年の「指導者用デジタル教科書(教材)」に付属しており、必要なときにいつでも開くことができます。黒板に掲示したり板書したりする手間も省けるため、授業準備の手助けにもなります。

視線を集めるためのテクニック

子どもたちに、教科書の注目してもらいたい部分を示すとき、私がよく使う機能は「ピンチイン・ピンチアウト」*です。指を使って画面をズームしながら、例えば「この曲は4分の4拍子だね」などとポイントを押さえていくと、子どもたちの目がずっとそこに集まります。タブレット端末など、いわゆるタッチ機能をもつデバイスを使っている先生は、ぜひ活用してみてください。タッチ機能のないデバイスの場合でも、画面左下にあるおおきくというボタンを選択すれば、カーソルをドラックするだけで範囲選択した部分の拡大を行えます。

*画面やパッドの上で2本の指をつまむように動かしたり開いたりする操作のことで、表示範囲の拡大・縮小をすることができます。



次号では、【音楽づくり編】と【鑑賞編】をお届けします。お楽しみに♪



音楽診断

Kyogei Presents

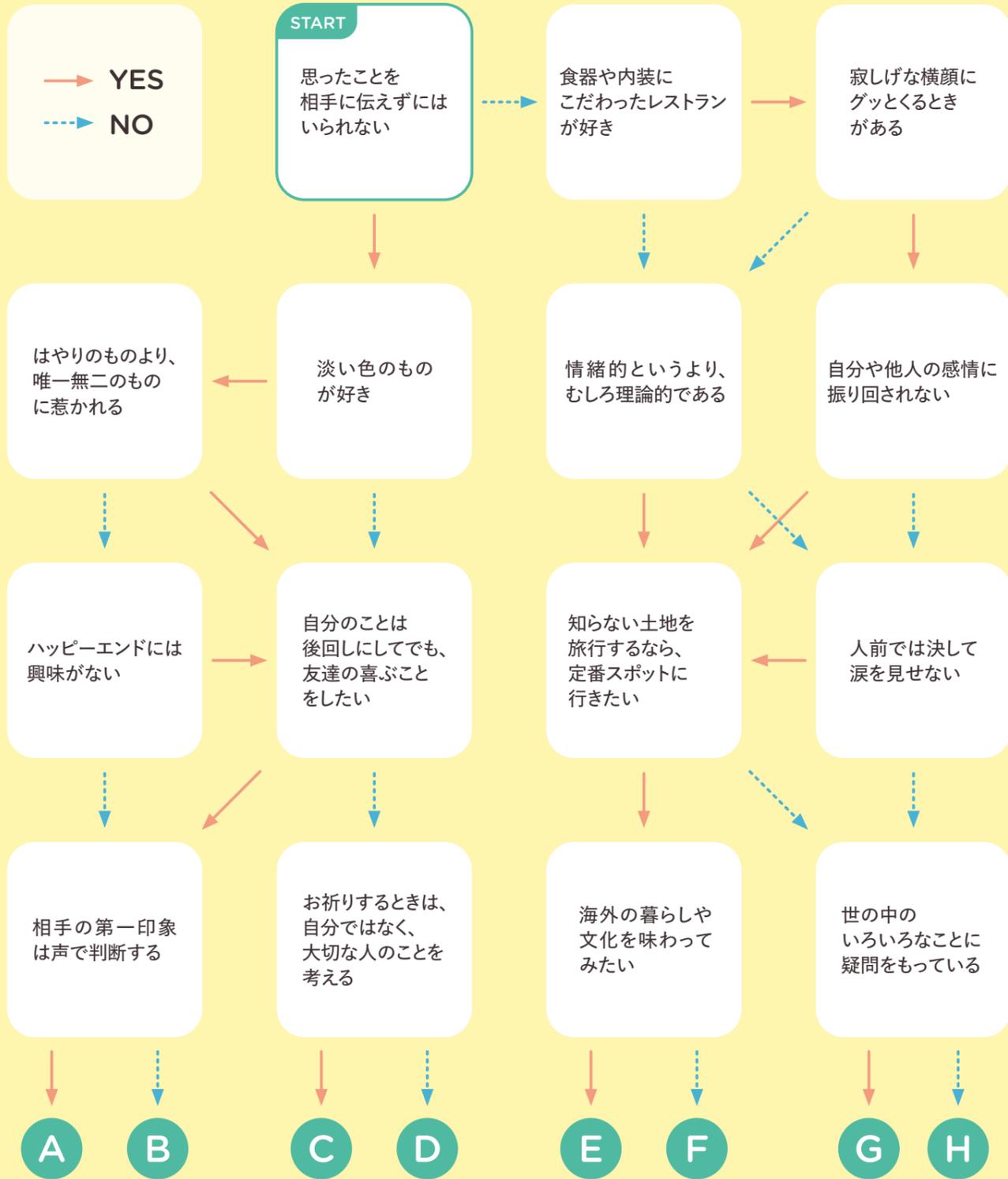
第21回

反戦や、戦争に対する思いが反映された曲編



『ヴァン』オリジナルでお届けする音楽診断企画の第21弾のテーマは、「反戦や、戦争に対する思いが反映された曲」です。8曲の中から、あなたにおすすめの作品をご紹介します。

監修・解説 = 小沼純一 Text = Junichi Konuma



テーマに寄せて

反戦にかかわる楽曲を選ぶというはなしをいただいて、ああでもないこうでもないという試行錯誤。とりあえずことばがついているもの、となりました。

難しいことばがついていけば方向が決まってしまう。しばしば楽曲の良しあしはあまり考慮されないこともあります。でも、それでは困る。音楽としての質の高さがあり、あわせてことばがついている、というものになりたい。そう考えました。意味のわからない外国語がついていても、音楽そのものがひびく。そうしたものをこそ、と。まずは聴いてみてください。聴いて初めて感じられるものがあるはずです。

あなたにおすすめの作品は？

A 愛する人を思う悲しみを柔らかく温かな音楽が包む 一本の鉛筆 美空ひばり (発表:1974年)

1974年10月にリリースされた美空ひばりのシングル・レコードは2つの楽曲が収められていました。《一本の鉛筆》と《八月五日の夜だった》、ともに広島に、原爆投下にかかわるものです。前者は「一本の鉛筆があれば戦争はいやだと私は書く」とあり、どこか、ポール・エリュアールの有名なレジスタンスの詩、『自由』を想起させるものがあります。



B 恐れと悲しみが響く祈りの音楽 平和のために祈ってください (Priez pour paix) F.プーランク (作曲:1938年)

15世紀フランスのCh.ドルレアンが聖母マリアにむけて祈る詩に、第二次世界大戦勃発直前、プーランクが作曲。淡々としたメロディーと、すこしきしむような「すべてを破壊する戦争」といったことばがおかれるところが、また詩人と作曲家双方が時代を越えて戦争へと抱えているものが、苦みとして感じられるでしょう。



C すべての人の平和を高らかに歌う 平和に生きる権利 (El Derecho de Vivir en Paz) ビクトル・ハラ (発表:1971年)

ごくあたりまえのはずなのに、そうならないこと、だからこそ「平和に生きる権利」をあえて、それも希望に満ちて、歌わなくてはならない。ベトナム戦争が起こっているとき、ビクトル・ハラはそうおもっていたでしょう。ハラの国、チリの政治状況も不穏で、歌の発表の約2年後、歌手は軍事クーデターで殺害されてしまいます。



D 多くの国で歌われつつける珠玉のシャンソン 脱走兵 (Le déserteur) ボリス・ヴィアン (発表:1954年)

詩人・作家・俳優と幅広い活躍をしたヴィアン。この詞が著作権登録されたのは1954年、インドシナ戦争の時期です。曲調はなんとなく勇ましさなど微塵もなく、むしろかたたくユーモラスですが、大統領に戦争には行かないよ、人を殺しはしないよと戦争への加担を拒みます。海をわたって、この列島でも何人もの歌手が歌っています。



E 民謡をもとにしたメッセージが人々に訴え掛ける 花はどこへ行った (Where have all the flowers gone?) ピート・シーガー (作曲:1955年)

「いつになったらわかるのだろう」とのリフレインは、戦争から学ばない人の愚かさを訴えます。シーガーはじぶんの書いたものを忘れていて、ジョー・ヒッカーソンが詞を加え、現在のかたちになったとされます。公民権運動から軍縮、環境問題と社会にむけて問題を提起しつつしてきたシーガー、父は作曲家、また民族音楽学の先駆者でした。



F 戦争の非情さを淡々と語る 死んだ男の残したものは 武満徹 (作曲:1965年)

「ベトナムの平和を願う市民の集会」で歌われるため、谷川俊太郎のテキストに武満徹が作曲、友竹正則がうたいました。武満徹のソングブックにも収録され、多くのひとが歌っています。「死んだ兵士の」とくりかえされる詞は、ずっと客観的な描写のみがつつぎます。それゆえかえって、死ななものがもたらす前と後がくっきりとあらわれてきます。



G 優しくはかないメロディーが印象的なヒップホップ undercooled 坂本龍一 (発表:2004年)

アルバム『CHASM』に先立ちシングルで発売された楽曲で、韓国のラッパーMC Sniperがラップします。2001年のアメリカ同時多発テロ事件を経験したNY在住の坂本龍一。楽曲では「自爆テロをどうやって防ぐ?テロリストを殺してどんな幸せが手にはいる?」といったことばで、その後の反テロの、報復へのうごき、熱さに、もっと冷静であること、を呼び掛けます。



H 力強い歌声が心を揺さぶる グッドナイト・サイゴン (Goodnight Saigon) ビリー・ジョエル (発表:1982年)

《ストレンジャー》《ピアノ・マン》といったヒット・チューンのあるビリー・ジョエルは、一人称複数 (we) を主語にして、海兵隊員がさまざまな体験することどもを織りこみ、ドラマティックな楽曲としました。ベトナム戦争は終結していましたが、逆に、戦争でのトラウマとなるものが重層的に描かれつつ、反対する力が提示されます。



小沼純一 (音楽・文芸批評家)

音楽を中心にしながら、文学、映画など他分野と音とのかかわりを探る批評をおこなう。現在、早稲田大学文学学術院教授。批評的エッセイとして『本を弾く 来るべき音楽のための読書ノート』『武満徹遺言』『音楽に自然を聴く』『映画に耳を 聴覚からはじめる新しい映画の話』ほか、創作に『sotto』『しっぽがない』『ふりかえる日、日めいのレッスン』ほか。編著に『武満徹エッセイ選』『ジョン・ケーージ著作選』『柴田南雄著作集I~III』ほか。2015-6年にはシンガポール、ソウル、東京でおこなわれた国際交流基金主催のコンサート『村上春樹を「聴く」』の監修もおこなった。NHK Eテレ『schola (スコラ) 坂本龍一音楽の学校』(2010-2014)のゲスト講師としても出演。



研究大会

10月 October

10日(木)・11日(金)

令和6年度 全日本音楽教育研究会 全国大会
旭川上川大会
第66回 北海道音楽教育研究大会 旭川上川大会
旭川市民文化会館 他

〈大会主題〉
音とつながる 心がつながる 学びがつながる

[問い合わせ]
令和6年度 全日本音楽教育研究会 全国大会 旭川上川大会 事務局
旭川市立神居東中学校 校長 坂東裕美
〒070-8014 旭川市神居4条19丁目
TEL 0166-61-8298 / FAX 0166-61-8276
kouchou@kamuihigashi.jhs.asahikawa-hkd.ed.jp

31日(木)・11月1日(金)

第65回 九州音楽教育研究大会 沖縄大会
アイム・ユニバース てだこホール 他

〈大会主題〉
伝え合おう 音楽の喜び
つなげよう 未来に向かって

[問い合わせ]
八重瀬町立東風平中学校 教諭 西平守良
〒901-0401 沖縄県島尻郡八重瀬町字東風平267番地
TEL 098-998-2107 / FAX 098-998-2958
https://www.ongakuyoiku-okinawa.com/kyushu.php



教育芸術社ウェブサイトでは、
この他の研究大会やイベントなどの
情報も掲載しています。

https://www.kyogei.co.jp/data_room/event/

11月 November

1日(金)

第55回 中国・四国音楽教育研究大会 広島大会
第60回 広島県小学校音楽教育研究大会
第55回 広島県中学校音楽教育研究大会
令和6年度 広島県高等学校教育研究会音楽部会研究大会

エリザベト音楽大学
RCC文化センター

〈大会主題〉
つなげる ひろげる 音楽でしあわせ

[問い合わせ]
広島市立五日市小学校 校長 河野陽子
〒731-5127 広島市佐伯区五日市三丁目1-1
TEL 082-921-3288 / FAX 082-923-9744
hiroshimakenonkyo@gmail.com

8日(金)

第72回 東北音楽教育研究大会 山形大会
第30回 山形県音楽教育研究協議会 村山大会
山形テルサ 大ホール 他

〈大会主題〉
「つながろう音楽と つながろう音楽で」
～心が動く楽しい音楽の授業づくり～

[問い合わせ]
東根市立小田島小学校 校長 須藤由美子
〒999-3774 山形県東根市大字郡山411-1
TEL 0237-43-4449 / FAX 0237-43-8259
odasho-6@yacht.ocn.ne.jp

8日(金)

第66回 近畿音楽教育研究大会 和歌山大会
第61回 和歌山県音楽教育研究大会
和歌山市・海草地方大会

和歌山城ホール 他

〈大会主題〉
《つながろう》《広げよう》《深めよう》
～心に響く音楽を～

[問い合わせ]
和歌山市立楠見中学校 教諭 久保真紀
〒640-8471 和歌山市善明寺706番地
TEL 073-453-6300 / FAX 073-453-6302
https://wakayamaonren.wixsite.com/onren
(和歌山県音楽教育連盟 HP)

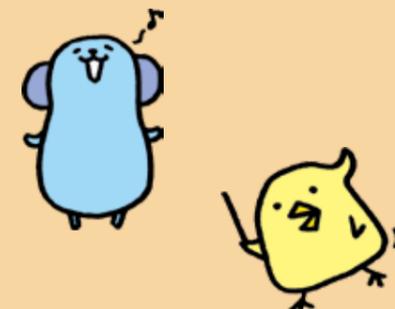
15日(金)

第66回 関東甲信越音楽教育研究会
新潟大会【長岡大会】
第48回 新潟県音楽教育研究会研究大会

長岡リリックホール

〈大会主題〉
「出会い かかわり ふかめる」
～他者と協働しながら、思いをもって豊かに表現する姿を目指して～

[問い合わせ]
長岡市立深沢小学校 校長 藤井美恵子
〒940-2135 新潟県長岡市深沢町3081
TEL 0258-46-3665 / FAX 0258-47-4734
26fuka@kome100.ne.jp
「第66回 関東甲信越音楽教育研究会 新潟大会」公式HP
https://www.kanonken-nagaoka.com/



Spring Seminar

スプリングセミナー 2025

— 新作合唱曲による公開講座 —

コンクール自由曲向けの新曲発表会「スプリングセミナー2025」を開催いたします。

同声・女声・混声の作品を作曲者、司会者、合唱団と学びます。
※詳細や最新情報は弊社ウェブサイト等でご確認ください。

- 日程：2025年3月29日(土)
- 会場：横浜みなとみらいホール 小ホール
- 司会：藤原規生
- 作曲家：[同声] 山下祐加、三宅悠太
[女声] 鷹羽弘晃、大熊崇子
[混声] 根岸宏輔、土田豊貴
- 合唱団：八千代少年少女合唱団
(指揮：長岡亜里奈)
おうたや
(指揮：田中エミ)
ユースクワイア アルデバラン
Youth Choir Aldebaran
(指揮：佐藤洋人)
- セミナー終了後、三宅悠太先生による合唱ワークショップを行います。
- お問い合わせ：
株式会社教育芸術社
スプリングセミナー実行委員会
TEL 03-3957-1168
FAX 03-3957-1740
<https://www.kyogei.co.jp/spring-seminar/>



最新情報は弊社ウェブサイト
で随時公開いたします。
<https://www.kyogei.co.jp/spring-seminar/>



最新情報は、スプリングセミナーの
Facebookでも発信いたします。
<https://fb.me/kgspringseminar/>

内容は予告なしに変更となる場合がございます。

詳細は
こちら



編集後記

猛暑や酷暑といわれるうだるような毎日が続いています。南極大陸の海水の減少により世界の大都市にも危機が迫っていると警鐘を鳴らすのは、第66次南極地域観測隊長を務める原田尚美先生です。加速度的に進む地球温暖化を肌で感じる昨今、我々には何ができるのか。「無音の世界」から地球の未来を見据える原田先生のお言葉、そして南極再訪への意気込みを笑顔で語られる姿が印象に残る取材となりました。

「授業者に訊く」と「特集」では、令和6年度から小学校教科書指導書フルセットに追加された「指導者用デジタル教科書(教材)」や弊社の音楽Webアプリケーション「カトカトーン」などのICTを活用した授業実践をご紹介します。「使ってみただけけど、どのように授業に取り入れたらいいのか分からない。」そんな先生方への指導のヒントとなることを願っています。

お忙しい中、取材や執筆、編集にご協力を賜りました全ての方に、心より厚く御礼申し上げます。今後ともご支援くださいますよう、お願い申し上げます。

表紙・巻頭イラストレーション
たかなかな

写真撮影
島崎信一 (STUDIO S+PLUS)

画像提供
シンエイ動画株式会社
藤原道山

イラストレーション
カワチ・レン
橋本金夢

表紙デザイン・本文組版
STORK

音楽教育 ヴァン 

発行者 株式会社 教育芸術社
(代表者 市川かおり)
〒171-0051 東京都豊島区長崎1-12-14
TEL. 03-3957-1175(代)
FAX. 03-3957-1174
https://www.kyogei.co.jp/
JASRAC出 2406114-401
©2024 by KYOGEI Music Publishers. ©-24
本書を無断で複写・複製することは著作権法で禁じられています。

*ヴァンは「vent」はフランス語で「風」。
新しい音楽教育の地平を切り開いていく
願いを込めています。



Recommend

小学生のための合唱パート練習用CD トリオン11、12

- 合唱のパート別の歌とカラビアナが収録されているので、伴奏者がいなくても簡単に音取りができます。
- トリオン11収録曲:君は虹を見たかい?/地球へ/星とたんぼぼ/さよならの前に/ことばを追い越して
- トリオン12収録曲:街にだかれて/ベガサス/君の空見上げて/リレーランナー/僕と君の未来へ/星影のエール
- 各価格3,300円(本体3,000円+税10%) / 1枚
- トリオン11:KGO-1204 ●トリオン12:KGO-1205



児童が最後まで聴きたくなる! 小学校音楽科 鑑賞授業の事例集③

粟飯原喜男 著

- 児童が興味をもって音楽を聴き、最後は全体を見通して聴けるようになる。著者が長年の経験から得たノウハウが満載の事例集第3弾!
- 定価1,210円(本体1,100円+税10%) / A4判 / 32ページ
- ISBN978-4-86779-068-7



New Song ライブラリー【混声編④】 クラス合唱新曲集 心の声

- 入学式から卒業式までさまざまな場面で歌える魅力的な18曲。作者によるメッセージを全曲掲載!
- 収録曲:心の声/空 へばくらの第2章~/眩しく光る歌/道しるべ/前に/あなたに届けよう/いつも 草のように/希望の光/夢を語ろう/満天の星々の下/南風が吹いたら/1/6の夢旅人2002/空色の日々/なんでもいいひとつ/ことばを追い越して/地球の涙/いにしへの道/瞳をとじて見えるもの
- 定価1,760円(本体1,600円+税10%) / B5判 / 104ページ
- ISBN978-4-86779-065-6



2024年10月
発売予定

準拠CD (別売り)

- 価格3,080円(本体2,800円+税10%) / 1枚
- GES-16058

混声合唱曲集 クラス用 キミウタ 2訂版

- 魅力的な10曲を新規収録した2訂版が登場!二次元コードから、選曲や演奏に役立つWebコンテンツにアクセスできます。
- 新規収録曲:カリブ 夢の旅/風をみつめて/大地のように/星めぐりの歌/虹/懐かしい未来/Annie Laurie/このみち/名づけられた葉/ほらね、
- 定価850円(本体773円+税10%) / B5判 / 352ページ(全60曲)
- ISBN978-4-86779-061-8



合唱・カラビアナ 追補CD (別売り)

- 価格5,500円(本体5,000円+税10%) / 2枚組
- GES-16033~16034

パート別 追補CD (別売り)

- 価格8,250円(本体7,500円+税10%) / 3枚組
- KGO-1206~1208



合唱・カラビアナ Section 1~5 (別売り)

- 各巻価格5,500円(本体5,000円+税10%) / 各巻2枚組
- GES-15486~15495

パート別 Section 1~5 (別売り)

- 各巻価格8,250円(本体7,500円+税10%) / 各巻3枚組
- KGO-1171~1185



小学校・中学校・高等学校教科書訂正のお知らせ



教科書及び指導書の訂正を当社ウェブサイトに掲載しています。誠に恐れ入りますが、ご確認のうえ、ご指導の際にはご留意くださいますようお願い申し上げます。

教育芸術社 LINE公式アカウント



ぜひお友だち登録
してください♪

はじめました!